すべての人の「あたりまえ」を守ることから

青海中学校　２年２組　高津　芽依

私がこの研修に参加したいと思ったのは、小学校５年生の時に『はだしのゲン』というマンガに出会ったからです。原爆投下後、両親を亡くした子どもたちの、子どもだけで生きていく苦しみが描かれていました。ゲン達の生活は、自分の生活とかけ離れており、同じ小学生なのに、現実にあったこととは信じられませんでした。原爆が落ちた時、またはその後に、どんなことが起こったのか、研修に参加して肌で感じたいと考えました。

私がこの研修で特に印象に残ったのは、平和記念資料館で見た黒こげになった少年が抱えていたお弁当箱でした。その年、お母さんが初収穫したイモが入っていたそうです。それを抱えたまま亡くなった少年のことを知り、一瞬で日常が奪われる恐怖が急に身近なことのように感じました。

被爆者体験講話では、波田保子さんから、原爆が落ちた後、生き残った人たちがどのように苦しんできたかをお聞きしました。波田さんのお父さんは被爆後「生きるも死ぬも家族一緒がいい。」といって、疎開していた保子さんを呼び寄せ、保子さんのお母さんと３人で、広島で一緒に暮らすことにしましたが、お父さんの顔は原形を留めておらず、体もうまく動かせないため、十分働けず、生活は苦しかったそうです。死んだ人も人間のように死ねず、生きた人も人間のように生きられなかったとお聞きしました。この話を聞いて『はだしのゲン』

の世界は、現実だったと知りました。

「あたりまえ」の生活を一瞬で奪う原爆を、私は二度と、世界中の誰にも、どこの国にも使ってほしくありません。「あたりまえ」は、世界中のどんな人にとっても大切で、かけがえのない幸福だということ、誰にも奪う権利のないものだとみんなが気づけば、きっと戦争のない平和な世界になるはずです。原爆を使う必要は、無くなります。

私にできることは小さいけれど、まずは自分の「あたりまえ」を大事に生きて、周りの人の「あたりまえ」を尊重できる人間になりたいです。原爆投下から７７年が経過しました。今回の研修で学んだことを、次の世代に語り継ぎ、原爆の恐ろしさ、戦争の悲惨さを風化させないよう、伝えていくことも私のできることの一つと考えています。

最後に、この研修に参加させていただき、たくさんのことを学び、とても充実した体験ができました。私たちの研修に関わってくださった皆さん、本当にありがとうございました。